洋１４－１０９

「ＮＯ」　　✽✽✽✽

２０１４（平成２６）年９月１日鑑賞<テアトル梅田>

監督：パブロ・ラライン
脚本：ペドロ・ペイラノ
レネ・サアベドラ（フリーの広告マン）／ガエル・ガルシア・ベルナル
ルチョ・グスマン（レネの上司、政権支持派「ＹＥＳ」の広告アドバイザー）／アルフレド・カストロ
ホセ・トマ・ウルティア（レネの友人、政権反対派「ＮＯ」の中心人物）／ルイス・ニェッコ
ベロニカ（レネの妻）／アントニア・セヘルス
アルベルト（「ＮＯ」の仲間）／マルシアル・タグレ
フェルナンド（「ＮＯ」のカメラマン）／ネストル・カンティリャナ
大臣（「ＹＥＳ陣営」の闇僚）／ハイメ・バデル
／パスカル・モンテロ
２０１２年・チリ、アメリカ、メキシコ映画・１１８分
配給／マジックアワー

＜現代史を題材にした社会派ドラマは、勉強ネタとして必見！＞

映画はエンタメだが、同時に勉強の素材。くだらない大学の授業を聴くより、２時間しっかりスクリーンを見つめ、鑑賞後それに関する資料を読みあさる方がよほど勉強になる。本作はタイトルだけでは何の映画かサッパリわからないうえ、南米のチリで１９８８年に起きた、選挙による「政権交代」のドラマ。しかし、そう聞いただけで興味を示す日本人は少ないだろう。

南米のチリで社会党と共産党による人民連合の統一候補とされたアジェンデ大統領が誕生したのは１９７０年だが、その当時学生運動に明け暮れていた私はそのときの高揚感をよく覚えている。また、そのアジェンデ政権が１９７３年のピノチェト将軍による軍事クーデターによって倒されたこともよく知っている。しかし、以降チリが長い間ピノチェト独裁軍事政権によって支配され続けたことや、１９８８年の第３回目の国民投票によってピノチェト政権への「ＮＯ」が勝利したことは、私でもよく知らない。

ちなみに、チリでは２０１０年８月５日に発生したコピアポ鉱山落盤事故によって、３３名の男性鉱山作業員が閉じ込められたが、事故から６９日後に全員が救出されるというニュースが発表され、これは日本でも大きく報道された。しかしその後、チリの政権は２０１０年には右派のセバスティアン・ピニェラが左派の候補を破ったり、逆に２０１３年には左派のミシェル・バチェレが大統領選挙で勝利して、セバスティアン・ピニェラの後任大統領に就任したりと左右に大きく揺れたことは、ほとんど知られていない。さらに、２００６年にピノチェト大統領が数多くの人権侵害及び戦争犯罪の裁判で訴追されたまま９１歳で死亡したことについても、ほとんど知られていない。

さらに考えてみれば、日本では、「慰安婦」報道をめぐって、８月５日付朝日新聞が、慰安婦を強制連行したことの根拠とされていた吉田清治氏の証言を「取り消した」ことを受けて、「河野談話」の訂正に向かうのかどうかが注目されているが、日本では、このような日本の現代史についての勉強すら不十分。したがって、チリの現代史にまで手が回らないのは仕方ないかもしれないが、そんな場合こそ、本作のような現代史を素材にした社会派ドラマは勉強ネタとして、必見！

＜「選挙」＝「民主主義」の価値をどう理解？＞

１９４５年の敗戦以降アメリカ型の民主主義を導入した日本では、今や公正な選挙が当たり前になっている。しかし、民主主義の形骸化が進む中で若者の選挙離れが顕著になり、地方議会の選挙では投票率が３割そこそこというのも常識になっている。しかし、イラクではイラク戦争によってサダム・フセインを追放したアメリカからイラク暫定政府に主権が移譲された後の、２００５年１月３０日に実施された憲法起草のための制憲議会選挙はものすごく大きな意義がある。

また、現在、香港では香港政府のトップを選ぶ２０１７年の行政長官選挙を実施するについて、中国の全国人民代表大会（全人代）常務委員会が新たに設置する「指名委員会」で立候補を制限する選挙制度改革案を説明したことを巡って対立が激化し、場合によってはセントラル（中環）の金融街を占拠する事態に発展するかもしれない。もし、そうなると、ひょっとして１９８９年６月４日に北京で起きた天安門事件の二の舞に？

本作が描くのは、１９８８年１０月５日に実施された、ピノチェト大統領の信任を問う第３回目の国民投票だが、日本の公職選挙法のような厳格な選挙制度がないピノチェト独裁下のチリで、ピノチェト政権反対派に許された選挙運動は１日わずか１５分間のＰＲができるテレビ放送枠だけ。それでも１９７８年の１回目、１９８０年の２回目に比べればまだましだが、ピノチェト大統領がこのように３回目の信任投票を決めたのは、アメリカを始めとする西洋諸国からの圧力をかわすためだ。したがって、ピノチェト陣営にしてみれば、選挙は本ンの形だけ。ピノチェト大統領の「善政」に感謝している多くの国民が、ピノチェト政権に「ＮＯ」をつきつけることなどありえない。軍事独裁政権を続けてきたピノチェト大統領は、まさに裸の王様のように、３回目の信任投票の結果についてタカをくくっていたが・・・。

＜テレビコマーシャルの功罪は？＞

本作の主人公、レネ・サアベドラ（ガエル・ガルシア・ベルナル）はフリーの広告マンとして働く男。ピノチェト独裁下でチリから亡命していたが、ほとぼりが冷めたので（？）今はチリに戻ってきているらしい。そんな彼の広告マンとしての斬新な感覚に目をつけたのが、反独裁政権の左派メンバーの１人で、国民投票の反対派「ＮＯ陣営」の中心人物である ホセ・トマ・ウルティア（ルイス・ニェッコ）だ。ピノチェトが今回実施する３回目の信任投票は、対外的にチリの民主性、開放性をアピールするためのものにすぎないとわかっているレネは当初は気乗りがしなかったが、いつの頃からか広告マンとしてのプライドが呼び起こされ、「負ける負けるというのなら勝ってやろうじゃないか」、というチャレンジ精神が芽生えることに。他方、レネの上司であるルチョ・グスマン（アルフレド・カストロ）は、レネの広告マンとしての才能を買っていたから、レネの才能が「ＮＯ」派のために使われることに反対。さらに、グスマン自身が元々「ＹＥＳ陣営」だったから、グスマンは、何度もレネを「ＮＯ陣営」から「ＹＥＳ陣営」に引き込もうと努力したが、レネは頑なだった。しかし、それはなぜ？そこらあたりが本作のミソだ。

本作には、依頼者からの注文を受けて、コマーシャル作りに励むレネの姿が登場するが、それを見ていると、レネの広告作りの基準はテレビの視聴者に受けるか受けないか、売れるか売れないか、の一点だけであることがよくわかる。すなわち、広告マンとしてのレネにとっては、何が正義か？政治とはどうあるべきか？国民の人権はどう守られるべきか？等々の理念はどうでもいいわけだ。そのことは、バブル崩壊後の今でも高い給料をもらって働いているはずの、日本の「電通マン」たちがつくる日本のテレビコマーシャルをみれば、よくわかるというものだ。しかして、そのようなテレビコマーシャルの功罪は？

＜パンフレットにある、４つのコラムに注目！＞

本作のパンフレットには、面白いコラムが４つある。まず、編集者／ライター、門間雄介氏の「７０年代生まれの監督たちは、現代史をどうやって映画化するのか？」は、現代史を題材にした、実話に基づく社会派ドラマをいくつか挙げた後、本作を第８５回アカデミー賞で作品賞を受賞したペン・アフレック監督の『アルゴ』（１２年）と対比しながら、面白い視点を提供してくれる。本作のような現代史を題材にした実話に基づく社会派ドラマは、『アルゴ』と同じように、結果はあらかじめわかっている。したがって、社会派ドラマながらもエンタメ作品に仕上げるためには、その経過を面白く描くことが不可欠だ。

そこで、私が面白いと思ったのは、その他のⒶコピーライター、仲畑貴志氏の「広告は、時代の先なんか行かない。」Ⓑ東京外国語大学名誉教授、高橋正明氏の「『喜び』は本当にやってきたのか」©国際ジャーナリスト、伊藤千尋氏の「ラテンの楽天性が独裁を倒した」、という３つのコラムにみる、広告の価値についての考え方の違いだ。本作を鑑賞するについては、是非パンフレットを購入し、この４つのコラムに注目してもらいたい。

＜３つのコラムを対比してみれば・・・＞

まず、©は、レネが本作で見せるテレビコマーシャルづくりを無条件に肯定し、そのプラス面を並べたてている。その結論として、タイトルも「ラテンの楽天性が独裁を倒した」になったわけだが、私の目には、こりゃちょっと単純すぎるのでは・・・。それに対して、Ⓐはコピーライターの職にあることの裏返しとして、「広告は時代の先なんか行かない」とは、いかにも広告の価値に対して、懐疑的かつ自虐的？「しかし、（その後のチリの曲折は別として）本当の勝者は、広告表現に惑わされず、広告が語る言葉の奥にある真意を感知して投票したチリの民衆である」と、誰もが異論のない結論に落ち着かせているのは、ちょっとズルイ。その視点が錯綜し、半分シラけていることはあきらかだ。

そしてⒷもⒶに近く、広告というものに絶対的な価値を認めていない。広告は所詮広告、ところが、その広告によって人間を動かすことができるわけだから、それが本当に良いことか悪いことなのかの判断は難しい。そのことは、広告を最も有効に活用したと言われるヒットラーの例をみればよくわかる。本作に見るように、レネが作ったとされるテレビドラマ「美女と勇者たち」のＣＭは一方では「コカコーラの宣伝のようだ」とバカにされたが、それでも明るさ、喜び、希望をキーワードとして散りばめた戦略は、結果的に成功したわけだ。

こんな視点で、パンフレットにある３つのコラムを対比しながら読めば、より本作の理解が深まるはずだ。

＜今、私たちが思い起こし、考えるべきことは？＞

本作では色鮮やかな虹のアーチと、「チリよ、喜びはもうすぐやってくる」という「ＮＯ陣営」のテーマ曲が印象的だが、それによって獲得した「ＮＯ」の選択は、ホントにどこまで価値があったの？その後のチリの情勢をみれば、そう思わざるをえない。そこで、日本人の私たちが思い起こさなければならないのは、２００９年８月３０日の衆議院議員選挙において、「政権交代」をキーワードとして実現させた自民党から民主党への政権交代だ。

戦後長年続いてきた自民党による一党支配を打破し、細川護熙を首班とする非自民・非共産連立政権が１９９３年８月９日に誕生した時、私を含めた多くの国民が日本の夜明けを期待した。それと同じように、２００９年８月３０日の政権交代では、鳩山由紀夫、菅直人やそれを支える民主党の若手有力議員たちによる新しい政治主導の始まりを予感したが、さてその実態は？人間（選挙民）は、ないものねだりをするもの。また、人間（選挙民）はすぐに騙されるもの。そのことが赤裸々にされてしまったのは、日本国民にとって大きな不幸だったと言わざるをえない。

しかして、そのように人間（選挙民）が簡単に騙されたのは、第１にテレビ・コマーシャルでさかんに流された「政権交代」というキーワードであり、第２に政治討論会でさかんに議論された「官僚政治の打破と政治主導」というキーワードだった。第２次安倍内閣は、第１次佐藤栄作政造内閣（１９６５年６月３日～１９６６年８月１日）の４２５日を抜いて、同一閣僚メンバーが６１７日も続く最長記録となったが、それも９月３日で終わり。それは、折りしもこの評論を書いている９月３日に内閣改造を断行したからだ。内閣改造は、内閣総理大臣の「専権」で、国民の選挙とは全く関係がない。しかし、そこで登用された閣僚や自民党役員たちは、すべて選挙で選ばれた国会議員だ。その国会議員たちは、自らが公約として掲げ、国民と約束した事項を再度確認したうえで、今後国民の付託に応えていく義務がある。

それはもちろんだが、本作を鑑賞しながら、私たち国民も、今一度選挙における投票の価値とその意味するものを考える必要があるのではないだろうか。

２０１４（平成２６）年９月４日記